楽しく美しいまちづくり通信…㊹

三代にわたりりんごの古木を守り続けて

りんごの古木を守る
近藤哲治（こんどうてつじ）さん（53歳）
（釜沢字平中）

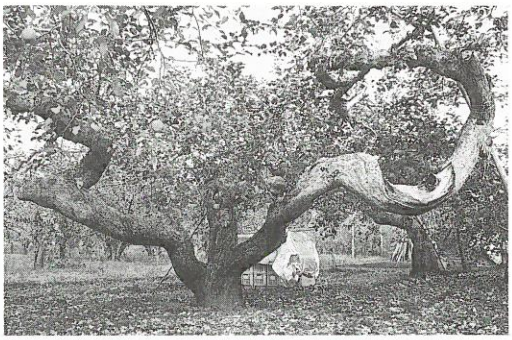
岩手のりんご栽培は、明治五年に盛岡で始まり、その数年後に舌崎地区にも導入され、その歴史は県内でも古く約百二十年になります。初めて導入された品種は、「紅玉」や「国光」で、接木による増植技術の修得によって栽培面積が拡大し、特に、終戦後の食料不足を契機に増植され、中央市場でも南部紅玉の名で知られるようになりました。

高校を卒業すると同時に、舌崎でりんご栽培を三十五年間続けている近藤哲治さんのりんご畑には、その歴史を物語るかのように、大正の初めに植えられたりんごの古木が十数本残っています。

この木は、近藤さんのお爺さんが植えたもので、樹齢八十年ぐらいになります。写真の古木は、下舌崎集落から北側に約百メートル入った畑の中にあり、幹回り百二十センチメートルと一番太く、地を這う龍のごとく根元から三方に枝が伸びています。この木からは、わい化木の十数本分の収穫があるそうです。

近藤さんは、「小さいとき、この木に良く登って遊んだもんだ。爺さんが植えた木だから、この木に三代世話になっていることになる。この木からいろいろなことを教わった気がする。」と木の成長を思い浮かべるように話してくれました。

また、「二十年程前までは、舌崎にもっと古くて太い木がたくさんあった。わい化に改植するときに切ってしまったんですよ。今、残っていたら百年は越えていたでしょう。でもその頃は、新品種やわい化に切り替えていかなくては、りんご農家は経営できない状況だった。それだけみんなが一生懸命だったんですよ。・・・ここも、改植しなくてはならないと思っているけど、全部切らないで大切に残したい。」と振り返りました。



80年の歴史を物語るりんごの古木

昭和四十年代初め、生産過剰による価格の暴落でりんごを山や川に捨てたこともありました。これを「山、川市場」と称しました。その後、新品種「ふじ」が救世主として現れ、紅玉、国光に変わり「ふじ」の収穫が本格的に始まり、りんご農家に活気が戻ったといいます。

今後、ますます農畜産物の国際的自由化が進む中で、これからも、いろいろなことがあるでしょう。

近藤さんが、りんご栽培でいつも心がけていることは、

・消費者ニーズにあった品種の適期切替え。

・木が要求していることに答えてあげること。

と締めくくりました。

こよみ

12月11日～1月10日

★12月★

11日（水）
12日（木）
13日（金）
14日（土）
15日（日）
16日（月）
17日（火）4カ月児健康診査（市保健センター）
18日（水）
19日（木）2歳児歯科健康診査（市保健センター）
20日（金）
21日（土）冬至
22日（日）
23日（月）天皇誕生日
24日（火）1歳6カ月児健康診査（市保健センター）
25日（水）
26日（木）
27日（金）
28日（土）
29日（日）
30日（月）
31日（火）大晦日